

繩紋式文化の性格に關する一・二の考察

藤岡謙二郎

一 前 が き

物の本質は、その物自体にぶつからねば把握されないが、又同時にその物の外に立つて之を見る事をも缺いてはならない。繩紋式文化の本質は、一見自然科学的にすら考へられるその土器の型式編年を経なければ把握し得ないが、同時に又我が日本文化全體の性格からする其の位置づけが必要である。右の見地からすると資料の不備に加へるにか様な見方の不充分から該文化の特質は、今日なほ充分理解されてゐない憾がある。私はいまこの資料の不備と自らの淺學を以てしてなほ且つ、門に入る者の一・二の後者の場合に於ける疑問をば後日の覺書に考察して見度いと思ふ。其の一つは繩紋式文化は、それが如何に細區分され個々のものに就いて究明されて行かうとも、繩紋式文化特有なものを持つてゐて、明かに次の彌生式文化と異つてゐるといふ點であり、その二はこの文化が世界の利器による文化の時代區分中、特異な存在である様に考へられることに就てである。

二 彌生式文化との過渡期に見らるる一様相

人類が存在する限り、その文化の歴史には生物の過去の歴史に見た如き災厄カタストロフは存在したとは考へられない。一見災厄の如く思はるるものも實は人類の場合では文化に於ける發展或は所謂飛躍を意味してゐる。

而して所謂飛躍なる姿もこゝではまたある文化の中に異質的要素が受容れられた場合に見られる様な氣がする。しかし文書類が具體的に示す歴史時代の場合とは異つて、遺物遺跡自體の形態研究に中心を置く考古學にあつては、これが理解は極めて容易ではない。而して獨り文化問題としてのみでなく人種問題と聯關するに於いては一層の困難を伴ふ。我が繩紋式彌生式兩土器文化過渡期の問題はこの意味で重大であると同時に、これが具體的移行の姿の闡明は今に困難な問題としてのこつてゐる次第である。尤もこれに就ては、既に清野博士は繩紋式文化荷擔者が舊アイヌでない事を體質人類學的に明かにされ、故濱田教授亦早く大正年間の河内國府の發掘に於いて兩土器の上から之を論じ、更に兩文化荷擔者の根本的には同一人種なる事を提唱されてゐる。たゞこゝで注意すべきは清野博士の見解は現存アイヌとの關係にとゞまり、濱田教授の場合も根本的には同一たる事を述べられてゐるに過ぎないことである。したがつて兩者の場合共根本的ならざる人種或は新文化の流入を豫想してをられるのであつて、自然な且つ當時としては劃期的な考へ方である。然し乍ら人種の問題を暫くおき文化の問題を見るに、今日では濱田博士の考説は事實の上から訂正されねばならない面を見受ける様である。博士は同遺跡第一回發掘の結果に基きその比較的下層から出土した繩紋式土器(博士の原始的繩紋土器)と、稍、上層の彌生式土器との系統論を述べて、前者を自然民族に於いて自から發明され得る原始的繩紋土器と見なし、右の模様の簡素となり窯法の進歩した結果生じたものが彌生式土器であり、また前

者の繩紋裝飾が極端に發達したものが曲線的(アイヌ式)繩紋土器となつたと提唱されたのである。しかしこの博士の原始繩紋土器なるものは、その後京都北白河小倉町の遺跡に於いて多數に見出されて梅原博士等によつて詳細に調査が行はれ、畿内の繩紋式土器中最古式の位置を占むる事が明かになつた今日では、この土器(所謂羽狀繩紋式土器)を以て直接彌生式土器に系統を考へることは困難になつて來た。されば今では吾々はバルボイのギリシヤ人も古典文明完成者のギリシヤ人と同一であり、更にピラミッド築成者も新石器時代と同じ埃及人である事を早くより感じられた濱田博士が之を日本の場合にも考へ及ぼされた、その廣い見地に立脚せられた當時の態度に敬服するのみである。

しからば今日では如何に考察すべきであらうか。これに就いては固より資料がなほ不備なる爲に具體的には究め難いものではあるが、我國の遺跡に所謂繩紋式らしくない繩紋式遺跡があり、又反對に彌生式らしくない初期の彌生式遺跡がある事後述の如くである點や、又前者の經濟段階と後者のそれとの間にはより大なる發展飛躍或は渠溝を見得ぬにも拘らず、なほ且つ之が伴出遺物の上では兩文化が明に區別せらる可きものがある事である。即ち遺跡、遺物換言せばその生産器具類の上からは、繩紋式的でもなく彌生式的でもないものが混然と發見されてゐない事をほゞ言ひ得る事である。この事は兩文化の移行の姿に於いて既述のカストロフ災厄を否定はするものと同時に一方、文化に於ける(考古學の言葉では遺物・遺跡の上に於ける)異質的なるものの混入を意味するものでなければならぬ。(尤もこの異質的なるものに該當する彌生式系の遺物の中、その何處までを異質とするかに就いては今なほ不明なる點が多い。例へばその標式的な石器類(後述)更には青銅器類が半島或は大陸の影響を伴ふことがほゞ遺物から考へ得られるにしても、土器の

初現に到つては不明と云ふの外はない。かの彌生式土器中最も古いと云はれてゐる遠賀川式土器就中壺の原形を内地にも半島にも求め得ない状態である。壺を別とするも、その莚にあつても之をば後述の繩紋式らしくない退化繩紋式土器から直ちに導かれ得る形とはなし難い。さりとて所謂彌生式らしくない彌生式土器の中に之を求める事は一層不自然である。後者の場合はむしろ彌生式土器の上に繩紋式土器の影響があつたと考ふべきと思はれる。して見れば今はたゞかゝる異質的なものゝ祖源を考察する事よりも、かゝる異質的なものを受容を得ながら、この過渡期世界に於いて繩紋式文化が如何なる姿を保持して行つたかのみを考察する事とする。要約し述べれば末期繩紋式文化の時代に於いては既に、遺物類が示す新生産技術保持者たる彌生式文化が成立してゐたこと、この後者の文化荷擔者が前者のそれと根本的に異らざるにせよ、その文化は前者から自然的に發生し得たものでないと言ふ事である。例ひ前者の經濟生活或は文化階段の中に既に後者を受け容れるべき素地が充分存在して居り、遺物遺跡にあらはれない多くの事象が後者に引き繼がれた事は考へ得られるにしても、なほ且つ後者の文化成立に對しては此の場合過渡期世界に於ける異質的なものの流入と考ふべきであると思ふ。以下事實に即し乍ら、これらの中に見られる繩紋式文化終末の姿のうち畿内を中心としたものに見られる一様相を考へて見よう。

先きに所謂繩紋式らしくない繩紋式遺跡と言ふたのは、先づ西より見て肥後御領貝塚^③、出雲鶴灘貝塚^④、長門宇都市川上貝塚^⑦、周防見能ヶ濱遺跡^⑧、備中津雲貝塚^⑨、但馬豊岡仲谷貝塚^⑩、紀伊鳴神貝塚^⑪、大和竹内遺跡^⑫、同樞原遺跡^⑬、同宮瀧遺跡^⑭、同三輪遺跡^⑮、河内日下貝塚^⑯、近江杉澤遺跡^⑰、尾張馬見塚遺跡^⑱、三河保美平城貝塚^⑲、同吉胡矢崎貝塚^⑳、同平井

稻荷山貝塚^①、飛驒木谷遺跡^②、信濃庄ノ畑遺跡^③を指すのである。更に彌生式らしくないとした彌生式遺跡とは主として中部乃至以東に分布するかの尾張西滋賀貝塚^④、美濃加茂町遺跡^⑤、飛驒西ノ山遺跡^⑥、信濃岡谷横遺跡^⑦、同栗林遺跡^⑧、加賀柴山瀉遺跡^⑨、駿河矢崎遺跡^⑩、相模小田原遺跡^⑪、下野野澤遺跡^⑫、越後山草荷遺跡^⑬、陸前柵形園貝塚^⑭、同飛行場遺跡^⑮等を云ふのである。いまは前者の場合のみを問題としてその遺物類を中心として吟味することにする。

如上のうち注意すべきは竹内、宮瀧、日下等の近畿地方遺跡の或者、更に瀨美半島の保美、吉胡、三河の稻荷山等の諸貝塚にては右の退化縄紋式土器が一方彌生式土器と少くも或る地點に於いては共存した事である。例へば竹内の場合を例にとると樋口清之氏の調査したA・B・C・D四地點中にて見らるゝのはA及びCの兩地點に於いてである。而かもA地點に於いてすら細部では出土土器を異にし、ある處では氏のA類土器とした磨消縄紋系その他縄紋、刻紋の土器を出土するに反して、之に接した地點では多量の氏のB類土器が盛期の彌生式土器及び末期のそれと伴つて出土してゐる。(氏のB類土器とは私の便宜上名づける退化縄紋式土器である)即ち共存とはいへ嚴密には中心地域を異にし、又彌生式土器の場合も彌生式特有の伴出遺物を持つてゐる。しかも右の遺跡に於いて大部分、その彌生式土器が前述の如き所謂彌生式ならざる彌生式土器ではなく、むしろ盛期の或は末期のものたる以上、右の複合遺跡は、たゞ時間的にほど兩者が同時に存在し得た事を物語るとすべきである。強ひて言へば、これらが遺物の上から自然的な過渡の姿を示さず文化周縁の姿を示してゐる事に依つて縄紋式文化と異質的な彌生式文化との接觸が、何等人種的なものの上に成立してゐない事を吾人に教へるのである。其の點あたかも今日の百姓の家の隣りに洋館が建

ち、或は舊式の豪農が自己の屋敷の中に洋風な、一見極めて不自然なものを取り入れてゐるが如きものである。

さてこれらの遺跡の基調をなす遺物類を見るに、便宜上退化繩紋式土器と名付けた類の特徴は何れも繩紋式的な稍、大形の深鉢乃至は甕形土器を形成して居り一般に薄手である。色調は暗黒色乃至暗茶褐色を呈し、焼成の不完好なものが多く、胎土に石英粒、雲母片等を含むものが見られる。其の器の表面はしかし粗雑であつて繩紋なく、僅に刷毛目様の斜行條痕が見られるにすぎない。また時に口頸部のみを平滑にして胴腹部と區別したのものもある。口縁は通じて平縁を呈するが、時に刻目縁或は山形把手、波狀縁等を呈するものも見られる。而して器底はやゝ上り底をなすものが多い。是等の土器の大きい或者は津雲、杉澤、馬見塚、吉胡、稻荷山等ではそのまゝ乳兒の骨を入れる甕棺をなしてゐるのである。如上の諸遺跡と共に日下、保美等にては、多くの屈葬人骨が発見せられて、それ等に抜齒の風習を見受ける事がまた注意される。更にこれらの土器は他方に磨消繩紋土器、龜ヶ岡式土器等と共存してゐることが擧げられる。例へば馬見塚、稻荷山、吉胡等に於いて見らるゝ東海地方のこの種遺跡(吉田富夫氏の雷式B類⁽³⁰⁾)には少量乍ら磨消繩紋土器の伴出が認められ、又龜ヶ岡式系(山内氏の大洞A式⁽³¹⁾)土器は竹内、樞原、宮瀧、日下その他の遺跡に於いて混出する。更に肥後御領貝塚の基調をなす口縁部に二、三條の並行條線を施したかの淺鉢形土器も津雲、樞原、宮瀧その他東海地方の遺跡に見出されるのである。して見れば、この退化繩紋式土器は一方に繩紋式文化圏としては終末の例へば東北地方の龜ヶ岡式文化圏、關東地方の堀ノ内式以降の文化圏と併行して、主として畿内地方を中心とした地域に存した事になる。而かもこれらの遺跡は地理上最も彌生式文化の影響を受くべき條件にあり乍ら、

なほ且つ縄紋式文化としてあり得る獨自な個性を保持してゐたと考へられる點は注意せねばならない。次にこの退化縄紋式土器遺跡と既述の彌生式的ならざる彌生式遺跡との關係を見るに、兩者が又一方時を同うして存在し得たに拘らず其の內的な親縁關係は見られない。後者の場合比較的前者に聯關を有するものは例へば西滋賀貝塚第一類、その他矢崎、柴山瀉、信濃(彌惣垣外)等に見受ける筈であるが、なほ且つその器面に強く刻された羽狀條線紋や、後者の口縁部に見られる口縁の外開きの感じ、或は下腹部のカーブの具合等彌生式的な特徴を保持してゐる。例へば西滋賀のものに就いて見ても底部と下腹部とのなす角はより大なる鈍角を形成し、むしろ直線に近く、加ふるにこれには底部に一孔が穿たれ、底面に平織布の痕を印して彌生式の漣に多い甗の代用品とも見る可き用途に供せられたであらう事吉田氏が述べてゐる如くである。況んやこれらの遺跡の基調をなす擬似縄紋(その縄紋はかの縄紋式土器に見る如き目の荒いものではなくてむしろ細い擦絲を轉廻させたが如きものである。)の施紋された壺形土器に接するに到つては、この事に深く思ひ到るのである。さればこれらの遺跡群も亦退化縄紋式遺跡群とは別な、より彌生式的にして、しかも獨自な性格を過渡期世界に保持したものと思はれる。而して伴出遺物にあつては彌生式文化の標識たる石器例へば石庖丁、片刃石斧、太形蛤斧、石斧等を伴ふ事は、その繼續時間のより大なる事を物語る一方より、彌生式文化たる事を示すものである。

次に右の退化縄紋式遺跡に於いて見出される土器以外の遺物類を觀察するに、先づ後期縄紋式遺跡に多い土偶の存在が挙げられる。即ち保美、吉胡、樞原等でそれが見らるゝ他、更に肥後では御領式の三萬田東原遺跡から出土して居

る。又飛驒に多い伴出土器の不明なる枕石の如きも木谷からは三個も出土してゐる。同様な石冠、而かも頭部の發達した新しい型式と云はるゝものが二個保美で發見せられてゐる。その他保美では非實用品或は裝飾品に近き曲玉、貝輪、骨器、石劍、石棒等が一部人骨に附隨して出土してゐるのである。この裝飾品たる貝輪、骨器等がまた津雲の人骨に附隨して居り、他方、石棒石劍の類が他の遺跡に於いて出土する事が注意されるのである。尤も是等は石棒と言ふも、その本來の型式は僅かに頭部その他が見らるゝにすぎず、扁平な石劍或は石刃の型式を持つたものが多いこと、杉澤、竹内日下等に於けるが如きである。而して杉澤にては別に飛驒に見られるかの多頭石斧の存する事小林氏の注意した如くである^⑩。又一般に退化繩紋式土器に伴ふ石斧類の多くが、彌生式のそれとは異つて、断面楕圓でなく定角或は圓形をして柄部が刃部の幅に較べて極めて短き事等注意されてゐる所である。石鏃に於いても無柄の三角鏃或は雁股鏃が多い。之を要するに退化繩紋式土器を標識とする右の諸遺跡では、その出土遺物のうちに、本來の様相とは異つたもの、おそらく彌生式文化の影響が考へられる——例へば土器自體繩紋なく、繩紋式土器たるにふさはしくないし、又合口壺棺の出現などに彌生式との聯關を考へしめるものがあり又多頭石斧は彌生式の環狀石斧と聯關を持ち、石劍の出現も亦同様に考ふ可く、なほ龜ヶ岡土器片に於いても、山内氏が大洞Aとした、より新しい、かの工字狀紋をもつ意匠の中に或は彌生式の流水紋との聯關が見られる様にも思はれる等それである——にも拘らず遺物遺跡の上にはなほ繩紋式的な性格を最後まで保持したことが認められる次第である。

以上の過渡期遺物に見られる、この事實は之を全體の上から如何に結論すべきであらうか。我が繩紋式並びに彌生

式兩文化過渡期の世界には少くとも、人種の問題は別にして、次ぎの五つの獨自な文化圏の成立を考へねばならないと思ふ。(一)東北に於ける龜ヶ岡式文化圏、(二)關東並びに中部低地に於ける堀ノ内式以降就中安行式文化圏、(三)中部高地以東を中心とする彌生式的ならざる彌生式文化圏、(四)畿内、中國を中心とする縄紋式的ならざる縄紋式文化圏、(五)北九州を中心とせる遠賀川式文化圏これである。是等文化圏はたゞ時間的に併行するから過渡期文化を構成するといふのではない。夫々の間に獨立した個性を保持して居り乍らも、なほ且つ互ひに發生的その他の有機的紐帯に結ばれて(但しこれに就いては今日なほ具體的には不明なる點が多いが)過渡期世界を構成してゐたと見られる。つまり我國縄紋式文化と彌生式文化の間には、右の五つの場合の過渡期があると同時に、これらすべての聯關の上に立つ、たゞ、一つの過渡期があるのである。右の意味に於いて夫々の文化圏を理解しようとする所に鄙見の主意がある。しからば右に述べて來た(四)の文化圏はこの全體の過渡期に如何なる位置を占めてゐるのであらうか。今假りに、最初彌生式技術が(三)に於いて受け容れられたものではなく、勿論此處に自然に發生し得たと考へられないで(五)に於いてなされたとせば——今日の資料のみからせば、かく考へるのが理解が比較的容易でなからうか。例ひ今(三)から發生したと考へても、(四)或はその他(一)・(二)等に於ける非縄紋的な要素の發生は、直ちに(三)と聯關して理解され得ぬ様な氣がする——この地域こそ最初の兩文化接觸の姿を物語るものでなければならぬ。それにも拘らずこの地域に於ける兩文化のあり方は遺物その他の上ではより不自然であり、より對立的である。これは調査の不備にも依らうが、異質的な技術が最初受け容れられた場合に見る姿であると解する事が穩當と思ふ。して見れば(四)の場合

こそ在來の繩紋式文化自體の變則的ならざる終末をより鮮かに示す考古學的な姿ではなからうか。既に繩紋式文化には厚手式文化期即ち勝坂式に於いて低次なハツク耕的な經濟段階に達してゐた事、又低地の後期繩紋式遺跡に於いては一部集約的な漁業の行はれてゐた事等後述の如くであつたとせば、例ひ北九州の彌生式技術を成立せしめた繩紋式文化なるものが具體的に不明であるにせよ、之を受け容れるべき表ひを既に充分保持してゐた事が考へられる次第である。鑄方貞亮氏は彌生式の稻が南方渡來のものでなく、既に野生稻が日本に存した事を述べてゐるが^⑩之等農耕技術のみを受け得たならば當時の繩紋式人は容易に之を栽培し得て彌生式人となり得た事が考へられる。かく見れば山内清男氏の調査した榊形式土器靱痕の見られる事も^⑪之が決して時代の下るものでない事を吾人に教へるのである。彌生式文化が、かくて早くも我が日本島に成立し、繩紋式文化終末のものと共存し得たとはいへ、東すればする程繩紋式文化人は己が傳統を保持してゐた。榊形式土器がなほも繩紋式土器的であるのは之が爲である。(一)の龜ヶ岡式文化の場合、或は(二)の安行式文化の場合、これらが夫々の中心地域(周邊的ならざる)に於いて如何なる彌生式文化への移行をとどめたかに就いては山内清男氏^⑫、故森本六爾氏等の意見があるがこゝには觸れないであらう。たゞ今述べて來た(四)の場合に於いて私は過渡期世界に於ける繩紋式文化自體のより發展した姿を見るのである。(四)の出現は發生的には、おそらく(二)の周邊部に於ける出來事であつたであらう)この文化は或は彌生式文化成立の眼から、或は後の歴史文化成立の眼から見れば或は發展した文化ではなくて殘存文化に過ぎないであらう。然し乍らこの殘存文化は繩紋式文化自體から見れば明かに發展であり、決して退化ではない。尤も右にあげた伴出遺物のみから見れば

ば、彼等の生産段階の實際がより發展したものとるか否か不明である。之は將來の遺物の増加と調査に俟たねばならないが、少くも(一)或は(二)等に見る多彩な様相にも比すべきものを保持してゐたのであらう。次に項を改めて、この所謂發展したものをも含めて少しく繩紋式文化の性格を考へ、更に利器による時代區分の問題を検討して見よう。

三 所謂中石器文化様相の検討

前述の如く繩紋式文化は既に彌生式文化を受け容れるべき素地を有してゐたが、それにも拘らず伴出遺物全般を通じて兩者の間には大きな距離があつた。而も之を規定する主なる要素は生産技術である。即ち彌生式文化は一口に言へば所謂農耕文化であるに對して、繩紋式人は稻の栽培を知らなかつた事である。但し農耕と言つても初期彌生式文化人の大部分は鐵器を知らない。又大和唐古の如き大聚落に於いて木製の鍬が出土したとは言へ、その刃部に鐵を附された跡もなく、況んや發達した犁の出土は之を見ないのである。假りに農耕具を石庖丁の多くに歸し、又糶痕のある此種土器類の上から農耕の存在が既に彌生式文化成立と同時に認められる事を推し得ても、吾人はなほそれが幼稚な低次の段階にあつたと考へねばならない。さればこゝでは一般論としてのみ彌生式文化を農耕文化として特徴づける事が許さるべきであらう。(彌生式のそれがなほ低次なものであつた事は、他に、右の遺物の分布の比較的限られてゐる事、石鏃の出土が尙ほ多い事、家畜としての牛等の骨の少い事等が裏書してゐる。)これに反して繩紋式文化は狩獵文化であり、漁業文化である。而して之等の最も發展した經濟段階を示したものである。但し一口に狩獵、漁業の文

化と言ふも、彼等が既に最初から土器製作者であり、家犬飼育者であつた以上、その特殊なものたる事を認めねばならない。彼等がなほ所謂食料採集者(Food Gatherers)の名で呼ばれるとしても、之を彼の舊石器時代人や、現存セマング・ウエツダ、クブ、ブツシユマン、フォイエルレングー・等の低級採集者の單なる狩獵或は漁業に従ふてゐる自然民族からは明に區別されねばならない。更に狩獵者の他に漁業者の附隨した彼のエスキモーの如きとも區別せらるべきであらう。是等がなほ不定な流浪と單なる食慾の満足者たる域を脱してゐない⁽¹⁶⁾に對して、繩紋式文化人は自然生産物の場所的、時間的利用を最高度に發揮し得たものである。尤も繩紋式文化と言ふも、その永い時間的進展の間に大いなる文化内容の差違が考へられる。それにも拘らず例へば初期のかの尖底土器を標識とする古式繩紋式文化荷擔者ですらなほアングマン島の土人等⁽¹⁶⁾より劣るものではない様である。これら特殊な所謂土器等を有する狩獵・漁業者の繩紋式文化が考古學の利器に依る文化段階の如何なる位置を占有すべきかに就いては、考察を要するものがある。これに關して近時八幡一郎氏其他の人々は中石器文化の様相が伺はれる事⁽¹⁷⁾を述べてゐる。以下これらの問題に觸れてその中で得られるものを、前述の點と結び合はせる事に依つて繩紋式文化の性格を考へて見ることにしたい。

遺物、遺跡を直接研究對象とする考古學に取つて、人類文化の發展を時代區分するには利器に依る他はない。しかし乍ら人類文化殊に今の場合先史文化の發展は必らずしも利器からする區分に依つてのみ把握されるものではない。こゝに考古學者は地史學者の時代區分、或は土俗學、社會學者の社會發展説を参照しなければならぬ理由がある。而もまた考古學者は、利器の中から遺物遺跡を組合した世界を考へ、むしろ後二者の立場をあくまで参照し批判する態

度を取らねばならない。これは遺物遺跡自體のもつ自然科學的性格と歴史學的、文化科學的性格から當然指示さるべきものである。さてトムゼンに依り樹立された石器時代は⁽¹⁴⁾一八六五年ジョン・ラボックに依つて、舊新兩石器時代に二分されたが、彼に依れば後者の概念は極めて簡單である。即ち前者は人類がマンモス、厚毛犀其他の絶滅哺乳類と共に生棲したのに反し、これは一名磨製石器の時代で、フリント其他の美くしい利器類で特色付けられ、未だ金屬が特殊な裝飾品を除いては日常の利器とならない時代である。この兩時代に對してなほ更にジョン・エベンス卿⁽¹⁵⁾は具體的に述べてゐる。一、舊石器時代(河漂礫層時代)、石器は未だ打製のみにして、研磨のもの行はれず、二、馴鹿或は洞窟時代(中佛を標識)、研磨の技術は骨器を仕上げる以外に全く使用されなかつたとは言へないが、なほ打製剝片技術が盛行を見た時期、三、新石器時代、或は現地表居住時代(Surface Stone Period)、フリント以外の手斧の使用等が數へられるであらう。右の所謂利器に依る考古學的な時代區分を更に、之等が必然する文化相の上からして考察したものとしてみれば、モルチレの研究が擧げられる⁽¹⁶⁾。彼の新石器文化とは湖上住居文化第一期が之に該當する。即ち彼が名付けたローベンオウジアン期(Robenhausienne)と舊石器文化との比較十五條のうち、自然環境に屬するものを除くと、後者に於いては、1 家畜が多い事、2 定着民(Populations sédentaires)、3 農耕が極めて發達せる事、4 一部磨石器の存在、5 土器の存在、6 ドルメン、メンヒル等巨石記念物の存在、7 死人の埋葬(Ensevelissement)、8 宗教心の發達等を主なるものとする。かくて吾人は少くとも歐羅巴の場合では、なほ他の二三の特色を添加することによつて舊新兩石器時代は次の如く大別し得ると考へる。先づ自然科學的規定の下には、前者が洪積世の所産である

事即ち地史學者の氷河時代に當るに對し、後者は現世殊に沖積世に成立した事。(而して勿論前者のフアウナ、フロラは絶滅種に屬する。)第二に遺物上の特色は、前者が打製石器の製作者であり、その種類も僅かに Combination tools とも言ふべきかの^①握り槌^②と剝片刃器を主とするに過ぎないに對し、後者にては磨研の術が加へられ^③握り槌^④に代るものとしては、別に刃の附された手斧が出現した外、剝片刃器からは立派な石鏃が發達してゐる。加ふるに他の遺物に於いて後者にはモルチレが列學した如き多様な様相を添加してゐる。所が歐羅巴の場合は、この兩文化間の飛躍は、自然科学的にも遺物の上からも、あまりに不自然であるために、十九世後半から人はこの過渡期の問題を論議したのである。當時の佛國先史學界には、なほ舊地質學者キュービーエー等の災厄説的な考へ方が支配してゐた爲に、右のモルチレですら、兩文化間に於ける渠溝(hiatus)を肯定したのであつた。^⑤けれども以後の發見に係る遺物遺跡の實際は時間的にも文化的にも兩者を繼なく時期を新たに設定せしめたのである。所謂中石器時代(l'âge mésolithique)がそれである。この中石器文化が問題に上つたのは歐羅巴でも今世紀に入つてからである、恰もかの原石器問題(Epilithénage)と歩を同うしてゐる。我國に之を紹介せられたのは大山柏公爵である。公爵に依れば^⑥中石文化トハ舊石文化ト新石文化トノ中間ニアル文化階梯ニシテ生業上狩獵ノ外、漁撈モ併セ營ミ得、中ニ家畜ヲ有スルモノモ有シ、構築術工トシテハ簡單ナル人工住居ヲ營ムモノモ生ジ、其人工遺物ニ於テハ僅ニ磨製石器ノ始源ヲ想像スルモノアルモ、大多數ハ打製石器、骨角器等ヲ併用シ、中ニハ僅少ノ土器ヲ所有スルモノヲ見ル文化階梯ヲ指シ、地質學上主トシテ沖積初期ニ存在スル文化ライフクとせられてゐる。今また之れに就いて一、二の鄙見を附加するに先づその

時間の問題にあつては、右の沖積世初期は一方では地史學者の後氷期(Post Glacial Period)に該当するのであつて、⁽⁴⁾右の中石器時代乃至文化の概念は、この事に依つて多く規定さるべき事である。所がこの後氷期が世界一般の現象であつたか否かは氷河問題と共に重要にして而も、なほ未解決な問題であつて見れば、中石器文化の時間的規定は、今の場合、北歐並びに中歐を中心とした地域にのみ妥當性を有するものではなからうか。中石器文化の經濟階段が漁業に基調を有する以上、之が先史文化發展段階の上に於いて、狩獵と農耕文化の中間に位置した事を主張する爲には、右の後氷期の問題は可成りの重要性をもつものと私は信ずる。しからざれば、中石器文化は新石器時代農耕文化の周邊に残存した退化舊石器文化の概念に置き換へらるゝ恐れがあるからである。次ぎに遺物の問題になると、それは明かに舊石器時代と異つてゐる。初期のマグレモーゼー(Maglemose)⁽⁵⁾を標識とするマグレモージアン文化に例を取つて見ても海岸低地への進出、細石器の發達(森林系哺乳動物の種類の増加)、家犬の出現、石入骨鏃、餗器、釣針、木製の擡等の發明と水禽類の増加、祖形斧の發明、尖底土器の出現等が注意される。⁽⁶⁾次の貝塚期に於いてもこの事は一層確實である。けれども之を農耕を標識とするモルチレの新石器文化ル・ローベンオウジアンに比せばその間に大なる生産技術の差異が考へらるのである。先づ土器が存するとは言へ前者にては極めて稀に近く、家畜の存在と雖も、亦エルテベレ(Erteballe)貝塚に家犬のみが多く知られてゐるのみで、後者に見るが如き牛、馬、豚等の骨は之を見な⁽⁷⁾ス。Cp. 22.

しからば我國の場合にはどうであらうか。一見した所では右の中石器文化は繩紋式文化に、亦、ル・ローベンオウ

ジアンが彌生式文化に性格的に類似する如く考へられる。それにも拘らずなほ我が先史文化には、これらとやゝ異つた姿が窺はれる。先づ繩紋式文化に就いて見るに、先づ我國に後永期があつたか否かは不明である。これは我が國の水河問題と共に考古學者が將來關心を持たねばならない所である。嘗て松本彦七郎博士は陸前の諸貝塚を調査され、例へば大木貝塚では暖海の *Arca granosa* L. を多く見られるのに對して、宮戸島貝塚には北方的な *Pecten yessoensis* を見受ける事を注意し、前者を北歐リトリナ時代前半に後者を其の後半に對比せしめられた。北歐リトリナ時代とは貝塚構成時代である。而して博士はこの現象を後永期的なものとし、その氣候輪廻の證據とされたのである。けれどもこれらは繩紋式土器型式からせば、接近した中期以降の小時期であつて、兩者間にかゝる大變化が見られたとは考へられない。のみならず貝類は水溫をこそ示せ、當時の陸地の氣候まで正確に物語るものでなからうから、博士の考説はなほ將來に問題をのこすと考へる。して見れば先づ繩紋式文化の時代を中石器時代と呼ぶ事は今日なほ資料が不足であつて不明であると言はねばならない。

次に經濟段階の上からはどうかであらうか。之を遺跡に就いて見るに繩紋式遺跡中海岸丘陵に位置するものは、初期から末期に到る迄大部分貝塚を構成してゐる事である。就中末期に到る程その規模大となり、出土遺物にも特色が見られる。例へば鯨骨の出土⁽⁵⁴⁾、イタボガキの養殖⁽⁵⁵⁾、更には補獲貝類の種類が限定されて來る(例へば蛤その他)等の事實は漁業がより次第に集約的になつて來た事を物語るものに他ならない。同様な現象は殊に東北龜ヶ岡式文化圏等では骨鉾、釣針等多彩な骨角器の發達となつて現はれてゐることまた人の知る處である。つまり我が繩紋式文化も亦彼

の中石器文化の如く漁業を基調としてゐる事が認められる。所が漁業には常に狩獵が附隨すべきものなる事は明かであり、引いて之等貝塚の他に、一般山岳地域の聚落が何れも遺物包含層を形成する所以である。たゞ然し乍ら我國の場合右の遺跡に於いて、北歐の場合等とは全く異つて多數の土器を伴つてゐる事である。而して殊に山岳地域を代表するかの厚手式土器の如き、器形自體の空想形式（フアンチキスム）の他に、土偶・土版⑥・石棒・石冠等の特殊な遺物を伴つてゐる事は注意せらるべきである。土器の出現が人類經濟史の上に極めて重要な指準をなす事は言ふ迄もなく、モルガンは之を以つて人類の未開と半開社會を區別した程であつた。⑦土器の存在が定着を或程度まで要請し、又その器形が煮沸と貯藏に適するが爲に、より農耕的であり、換言せばより新石器文化的である事を示してゐる。所が我國に於いては初期のかの尖底土器（或は北歐のそれも）その定置の如何にも困難なる事（但し砂地では安定）から、之が籠等の如く、持ち運びの容易の爲に背中等に置かれて、單なる自然物の採集容器として役立つたものとなり、それが後には一般平底の器形の變化に富むものをうみ、之が煮沸の他に、貯藏等の容器を形成するに到つたものと思はれる。但しその器形に於いて彌生式土器の如き實用的なもの、例へば大形の壺、甌等の器形を見ない。しからば貯藏品として如何なるものが蓄へられたであらうか。これに就いては如何なるものであるか、彌生式の場合の如く實物の遺存を見ないが、それ等からよしや稻の栽培を見なかつたにせよ、穀物その他の低次な栽培、焼畑等の存在を假定してもよいのではなからうか。嘗つて大山公爵が勝坂遺跡發見の廣刃の打石斧を以て土搔きと想定されたが、二三の人々も想像した如く、⑧私は我が縄紋式文化には、中期以後一部にハック耕（Hackbau）の存在し得た事を信じたい。之が又獨り山岳地域に於いての

みならず、低地に於いても成立が可能であつて見ればかゝる立地の中に亦彌生式文化を受け容れるべき姿を見得るのではあるまいかと思ふ。但しこのハツク耕は農耕の前段階にあるにも拘らずなほ、且つ、我國の場合漁業、狩獵文化と密接な關係にあつたものと推測すべきである。何故ならば一見より農耕的と思はれる右の土偶・土版・石棒・石冠等の存在が次第に彌生式文化の影響を受くるに従つて、姿を消し、後者の如きは刃部の發達を見て、實用器に近づいて行く事既に本文の初に見た如くである。所詮これらの非實用品は寧ろ、かの舊石器文化に見た土偶の如き役割を演じたより狩獵文化的なものであつて、小アジア、クリートその他近東世界の金石併用期に見られるそれとはへだたりのあるものではなからうか。然らば北歐中石器文化の場合どうかと云ふに、パツサルゲはハツク耕の南方からの移入をこの時に考へんとしてゐるが、こゝには繩紋式文化に見るが如き多彩な様相を見ないのである。たゞ家畜として既に家犬(これは狩獵並びに番犬として使用されたものであらう)を見る事のみが繩紋式文化に類似してゐるに過ぎない。要するに繩紋式文化は經濟段階の上からのみ大觀すれば、農耕を標識とする新石器文化よりも中石器文化に近い趣を備へるが、なほ且つ中石器文化階段としては特殊な最高次のそれであると言ふべきである。但し之は文化階梯の上からの所見であつて、遺物遺跡の形態或は系統の上から論ずべき考古學徒に取つては、この問題は先きの中石器時代の問題と共に考察を將來に俟たねばならない。八幡一郎氏は嚮に我國に於いて北歐中石器時代の遺物に類似したものが見出される點から、是等を以つて直ちに我が日本文化中に中石器文化様相のあることを鋭くも説かれたのであつた。而して三森定男氏・樋口清之氏等何れもこの意見を支持せられた。筆者も右の意見の多くの教示を得たのであるが、

注意すべきは、なほこれらに於いて、既述の文化の根本性格の比較が第二次的に取扱はれてゐるのではなからうか。

極端に言へば法隆寺のエンタシスが希臘式であつても、飛鳥文化が希臘文化でない事もあり得るのである。遺物に關する限り、今日の資料を以つてしては、たゞ單に或者が似てゐると言ふに止まる状態である。加へるに我國に細石器は出現してゐないのであり、亦初期の剝片石器が彼の中石器文化に見たそれに親縁關係を有するものとも考へられぬ。又尖底石器に到つても今日之を我が國周邊に近縁のものを直ちに求め得ない現状にある。更に大形打石器にしても果して北歐の巨石器に聯關づけ得られるであらうか。チャート、蛋白石等からなる東北地方日本海沿岸出土のものはまだしも、畿内に於いて見出されるものはサヌカイトであり、而も彌生式文化の所産と見る可き状態であつて見れば今日の資料から我が國に中石器時代の中石器文化があつたか否かは到底斷定し得ないかと思ふ。尤も様相の概念は時代の概念と別なる事繰返して述べた所であるから、私は時代概念としてではなく、様相概念としてのみ、而も既述の方法から今は繩紋式文化を特殊な中石器文化であると言ふ事を否定しようとは思はない。しからば我國の彌生式文化こそ文化段階の上からは眞の新石器時代の新石器文化に該當するのであらうか。所が之に於いても條件が附される。即ち金屬器の問題である。假りに彌生式文化が既に北九州で最初から青銅器を所有してゐたとしても、日常一般の利器としてではない事から、なほ新石器文化であると考へ得ても、その第三期に到つては少くとも鐵器が存在してゐる。之は積極的な證據の他に、土師器に近い彌生式遺跡に全く石器を缺く事から考へられる。して見れば彌生式文化も後半は、之を南歐等で見ると如く金石併用期(Periodo eneolitico)文化の名で呼ばねばならぬ事既に故濱田教授

が述べられた如くである。⁽⁴⁴⁾この限りに於いて彌生式文化も亦中歐北歐等で、除々に移行の見られる湖上住居文化就中ローベンネウジアン文化とやゝ趣きを異にするものと見なければならぬ。これらは既述の繩紋式文化のあり方と共に我が國の風土が規定した、最も日本的な先史文化のあり方であらうと考へる。而して前項の場合で見た兩文化過渡期の姿にもこの事を深く感ずる次第である。

四 四 四 四 四

前がきにも一言した如く、此の小編は繩紋式文化に就いて、それが次の彌生式文化への移行の上に見られる一つの姿の上から、又世界先史文化の區分の上から、この文化に如何なる性格が存するであらうかを考へて見たのであつた。それは固より門に入る者としての先づ考へ及んだ疑問の一二を中心として、概觀したものであるが爲に詳しい遺物の實際に就いて論證することなく、引いてその點で不備の多いことを感ずる。是等に就いては他日實物に即した報告書に於いて述べ可く、同時に將來資料の増加を俟つてその修築と考察の發展を所期したい。こゝに重ねて繩紋式文化には我が固有の島國的風土がそれを規定し、又成立せしめた特殊な性格がある事、而もそれは彌生式文化への移行の姿に於いても、又世界の先史文化に於ける位置からも、あざやかに認識さるゝ事のみを強調して擲筆する。

(終りに彌生式文化の遺跡、遺物の實際に就いては小林行雄氏の助言を得た事を感謝する。文中の歐洲中石器文化自體の問題に就いては私は卒業論文で若干考へた所であるが、これに就いては當時から始終大山柏公爵の指導を受けてゐる。たゞ公爵が之をば繩紋式文化自體と如何に結びつけて考察してゐられるかに對して、なほ多くを聴いてゐない。他日の教示を冀ふ次第である。)

(昭和十六年一月二十九日)

- 註① 原隨園博士、「轉換期とその諸相」(『理想』第百十六號)昭和十六年参照。
- ② 清野謙次博士、「日本石器時代人研究」(昭和三年)、及び同博士、「金關丈夫博士」日本石器時代人種論の變遷」(『日本民族』(昭和十年)参照。
- ③ 故濱田博士、「河内國府石器時代遺物發掘報告」(『京都帝國大學文科大學考古學研究報告』第一册)(大正七年)及び同博士、「辰馬俊藏氏」(同二回發掘報告)(大正九年)。
- ④ 梅原博士、「京都市北白川石器時代調査報告」(『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第十六册)(昭和十年)。
- ⑤ 三森定男氏、「先史時代の西部日本」(『人類學、先史學講座』第一卷)(昭和十三年)。
- ⑥ 山本清氏の厚意に依り遺物・遺跡を見た所に基く。
- ⑦ 小川五郎氏の厚意に依り見た山口高等學校所藏の遺物に基く。
- ⑧ 島田貞彦氏、「周防國吉敷郡見能ヶ濱遺跡」(『考古學雜誌』第十五卷十二號、大正十四年)
- ⑨ 清野博士、島田氏、梅原博士、「備中國淺口郡大島村津雲貝塚報告」(『京大考古學研究報告』第五册)。
- ⑩ 遺物は京大考古學教室藏。
- ⑪ 同右。
- ⑫ 樋口清之氏、「大和竹内石器時代遺跡」(昭和十一年)。
- ⑬ 發掘主任末永雅雄、澄田正一氏等の厚意に依つて見た遺物遺跡の實際に基く。
- ⑭ 同上末永氏の厚意に依る遺物の所見に基く。
- ⑮ 樋口清之氏、「三輪遺跡とその遺物研究」(『大和石器時代研究』昭和九年)。
- ⑯ 正報告は未だ見ないが、大阪府が調査。筆者も發掘に参加し得た。その他島田貞彦氏、「河内國中河内郡目下發見の貝塚に就いて」(『人類學雜誌』第四十一卷)参照。一般に西貝類は彌生式である。

- ① 小林行雄氏、中村氏、筆者、「近江坂田郡春照村杉澤遺跡」(『考古學』第九卷五號、昭和十三年)。
- ② 大場磐雄氏、「尾張馬見塚探查記」(『考古學』同右)。
- ③ 大山柏公爵「愛知縣渥美郡福江町保美平城貝塚發掘概報」(『人類學雜誌』第三十八卷一號、大正十二年)この場合は發掘地點 A・B・C・D の中 D 點のみが共存、他は皆縄紋式の様である。
- ④ 清野博士「日本原人の研究」(大正十四年)、遺物は京大病理學教室所藏。
- ⑤ 江馬修氏、「白川村木谷の石器時代遺跡」(『ひだびと』五ノ八、昭和十二年)、筆者は江馬氏の厚意に依り遺物を實見する幸を得た。
- ⑥ 鳥居龍藏博士、「諏訪史」第一卷、大正十三年。
- ⑦ 吉田富夫氏、「尾張西濫賀貝塚發見の石器に就いて」(『考古學』第五卷、一、二號、昭和九年)其他森本大爾氏、小林行雄氏、「彌生式土器聚成圖録」(昭和十三年)、「愛知縣史蹟名勝天然記念物調査報告」第九、昭和六年)等参照。その他吉田氏、「尾張國甚目寺町の彌生式遺跡」(『考古學』九ノ一参照)。
- ⑧ 美濃林魁一氏の厚意に依る遺物の所見に基く。
- ⑨ 江馬修氏の厚意による遺物の所見に依る。
- ⑩ 鳥居博士前掲書、藤森榮一氏「信濃の彌生式土器と彌生式石器」(『考古學』第七卷七號、昭和十一年)小林行雄氏等「前掲書」。
- ⑪ 神田五六氏「信濃栗林の彌生式石器」(『考古學』第六卷十號)同氏、「北信濃栗林の彌生式土器」(同第七ノ七)、小林行雄氏等前掲書。
- ⑫ 三森定男氏、筆者、「加賀柴山湖畔の石器時代遺跡に就いて」(『考古學論叢』第十一輯、昭和十四年)この場合石器のみは一、二ではあるが、他の場合と異つて彌生式的一般石器ではなく、打石斧、小形磨石斧が出た。但し後者は一般彌生式遺跡にても見られる。

- ③⑩ 江藤千萬樹氏「矢崎遺跡豫察」『上代文化』第十六、昭和十三年。
- ③⑪ 杉原莊介氏「小田原出土彌生式土器」『人類學雜誌』第五十一卷一號、昭和十一年。及び同補遺『同』四號。
- ③⑫ ③⑬ 山内清清男氏、「石器時代にも稻あり」『人類學雜誌』第四十卷五號)、同氏「日本先史土器圖譜」第一部第一輯)、同氏「日本遠古の文化」(昭和十四年)、杉原莊介氏「下野野澤遺跡及び陸前槲形園貝塚出土の彌生式土器の位置に就いて」『考古學』第七卷八號、昭和十一年)。
- ③⑭ 大木金平氏の厚意による遺物の所見に基く。小林氏前掲書参照。
- ③⑮ 遺物は一部合口甕棺をなす。伊東信雄、山本樹次郎兩氏の厚意により見た東北帝大所蔵の遺物の所見に依る。
- ③⑯ 吉田富夫、杉原莊介兩氏「東海道地方先史時代土器研究」『人類學、先史學講座』第十二卷、昭和十四年)。
- ③⑰ 山内清男氏「日本遠古の文化」(前掲)。
- ③⑱ 小林行雄氏等「彌生式土器聚成圖鑑」(前掲)。
- ③⑲ 三森定男氏「先史時代の西部日本」(前掲)。
- ③⑳ 鑄方貞亮氏、「本邦古代の稻に關する二三の問題」『農業經濟研究』第十六卷四號、昭和十五年)。
- ㉑ 山内清男氏「所謂龜ヶ岡式土器の分布と繩紋式土器の終末」『考古學』第一卷三號、昭和五年)。
- ㉒ 故森本六爾氏「東日本の繩紋式時代に於ける彌生式並に祝部式文化の要素抽出の問題」『考古學』第四卷一號、昭和八年)。
- ㉓ 末永雅雄氏「日本先史時代木器の條例」『人類學、先史學講座』第十五卷、昭和十五年)。
- ㉔ 『日本原始農業新論』『考古學評論』第一卷第一號、昭和九年)。
- ㉕ 家犬(Canis familiaris)の骨は既に諸磯式貝塚から出現する。(八幡一郎氏「日本石器時代文化」『日本民族』昭和十年)。
- ㉖ C. Daryll Forde; Habitat, Economy and Society, A Geographical Introduction to Ethnology 1934.
- その他經濟地理的な事項は織田武雄氏の助言を受けた事が多く。

- ①⑦ 八幡一郎氏「日本に於ける中石器文化的様相に就いて」(『考古學雜誌』第廿七卷六號、昭和十二年)、その他三森定男氏「日本原始文化の構造」(『考古學論叢』第十五輯、昭和十五年)等々。
- ①⑧ C. J. Thomsen; Ledetraad for nordisk Oldkyndighed. 1836. (Leitfaden zur nordischen Altertumskunde. 1837)
- ①⑨ Lord Avebury; Prehistoric Times, as illustrated by ancient Remains & the manners & Customs of modern Savages 1913.
- ②⑩ Sir John Evans; The Ancient Stone Implements, weapons & Ornaments of Great Britam (1897) p. 53-54.
- ②⑪ G. de Mortillet, Le Préhistorique, Antiquité de l'homme. 1883.
- ②⑫ C. de Fondouce; Sur la lacune qui aurait existé entre l'âge de la pierre taillée et celui de la pierre polie. (Congres international d'anthropologie et d'archéologie préhistoriques. (1874)
- ②⑬ 大山柏公爵「日本舊石文化存否研究」
- ②⑭ 小牧實繁博士、筆者「先史時代の地理的環境」(『人類學、先史學講座』第十七卷、昭和十五年)。
- ②⑮ G. Sarauw, Maglemose, Ein steinzeitlicher Wohnplatz im Moor bei Mullerup auf Seeland, vergleichen mit verwandten Funden (Praehistorische Zeitschrift, 1911)
- ②⑯ 筆者「マゲレモーツアン以前の文化管見」(『考古學論叢』第十一輯、昭和十四年)。
- ②⑰ 鈴木恒吉譯「デンマークの貝塚に於ける石器時代家畜」(『史前學雜誌』第九卷五號、昭和十二年)。
- ②⑱ H. Matsumoto; Evidences of the Post-Glacial Cycle of Climatic Changes in North Eastern Japan 1930.
- ②⑲ 池上啓介氏、「鯨骨を出土せる石器時代遺跡」(『史前學雜誌』第五卷三號、昭和八年)。
- ③⑰ 酒詰伸男氏、「神奈川県貝塚調査概報」(『人類學雜誌』第五十三卷三號、昭和十三年)。
- ③⑱ 池上氏、「土版岩版の研究」(『上代文化』第十號、昭和八年)。

③ L. H. Morgan: *Ancient Society, or Researches in the lines of Human progress from Savagery, through Barbarism to Civilization* (1877)

③③ 三森定男氏「日本原始文化の構造」(前出、第四輯、昭和十四年)。

③④ 大山柏公爵「神奈川縣下新磯村字勝坂遺物包含地調査報告」(昭和二年)。

③⑤ 佐藤弘・國松久彌氏抄譯『パツサルゲ、景観と文化の發達』(昭和八年)。

③⑥ 故濱田博士『考古學研究』(昭和十三年)。

③⑦ 八幡一郎氏「環頭石斧類」『考古學』第一卷二號、昭和五年)。

③⑧ 我が國氷河の問題は最近まとめられ様として來てゐるが、(例へば今村學郎氏「日本アルプスと氷期の氷河」昭和十五年) 後氷期の問題は未だ取り上げられてゐない様な気がする。

③⑨ 三森定男氏「日本先史文化に關する諸問題」『考古學論叢』第七輯、昭和十三年)、樋口清之氏「日本原始文化史」(昭和十四年)。